

秘劍やませみ

伊藤桂一



講談社
文庫

ひ けん
秘剣 やませみ

い とうけい いち
伊藤桂一

© Keiichi Ito 1993



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1993年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてをお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185483-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

秘剣 やませみ

伊藤桂一

講談社

目次

秘劍やませみ	七
女敵討の秘劍	三
花売り劍法	四
勝者の獲物	九
亡霊の劍法者	二九
犬神乙女	四〇
狼討ち	一七
異邦の劍	二五

解説

磯貝勝太郎

三三

秘劍 やませみ

秘劍 やませみ

浅草寺せんそうじの西方の一廓は、寺ばかりがたくさん集まっているが、なかには、無住のままに荒れ果ててしまっている寺も、ある。

行海ぎょうかい——と名乗る僧のあとについて、富田志乃とだしのが案内されたのは、そうした荒れ寺のひとつであった。石塔や卒塔婆そとうばも崩れ放題、それを枯れ律むらが蔽おほっている。

空には五日月。昼間ほどではないが、かなり明るい。

その月あかりの中に、ぼっかりとほの白く浮いてみえるのは、境内の片隅にある山茶花さざんかの一樹で、花がびっしりについている。

初冬の夜更けなのだが、今夜は、あたたかである。

「驚かれたかな。ひどい荒れようよの。もっとも、これが拙僧の好みでの」

先に立った行海は、振り向いて、志乃にそっくり、月あかりに、笑った顔がかすかにうかがえたが、そのまま、庫裡くらへ歩み入る。

その庫裡がまた、ひどい。

崩れ残った一棟。その家のとば口のひと間に、筵むしろが二、三枚敷いてある。戸障子も満足にない

から、月あかりだけは充分に射し込む。

それでも行海は、家に入ると、棚の片隅の燈芯皿とうしんざらに火を点ともす。

旅の托鉢僧たくはつそうの仮りの宿にしても、お話にならぬ、ひどい住居ではある。

「どこぞで、寛くわんがれよ。拙僧も、身なりをととのえ申すゆえ」

頭は坊主のままだが、身なりは貧乏浪人の恰好をしている行海は、着ているものを無雑作にはらりと脱ぐと、下は、下帯一枚だけになる。

志乃は、思わず、眼を逸そらす。

行海は、片隅に抛ほうつてあつた僧衣を、手早く身につけたが、その僧衣がまた、つぎはぎもいところの、いかにも貧乏くさい托鉢着である。もつとも、衣食住にかまっていたは、托鉢暮らしなどではできない。

「客人を、案内はして参つたが、もてなすものがなにもない。貰もらい物の沢庵たくあんでもかじっていただき、よろしければ、これも貰もらい物の般若湯はんにやとうでも進ぜよう」

行海は、片隅の貧乏徳利を持って、どか、と、志乃の前に坐し、あたりにころがっている欠け茶碗を二つとると、その一つに酒を注いで、まず、志乃の前に置く。

——この時まで、志乃は、なにやら呪法じゆほうにでもかけられたように安心していて、ずっと、行海という異様の僧に、惹ひかれつづけてきたのである。

——その時から、半刻はんときほど前。

富田志乃は、商家の御新造^{ごしんぞう}ふうに身なりを変えて、下谷^{したや}稻荷のあたりから三味線堀に向けて、寺院や武家屋敷のつづく通りを、提灯ひとつを手にして、急ぎ足に歩いていた。

急病人でもできて、医師を呼びにでも行く様子に、みせかけている。前くぐみの、せかせかとした歩きぶりである。

武家屋敷の、長くつづく土塀を尽きて、道の辻へさしかかった時、道脇の天水桶の蔭から、黒覆面の、辻斬りとしか思えぬ風体の侍が、ぬっと現われている。

無言のまま、近寄ってくる黒覆面の男に向け、志乃は、とっさに提灯をすてる。提灯の柄に、小太刀が仕込んであり、落ちた提灯はめらめらと燃えたが、志乃は尺二寸の小脇差を構えて、相手を待った。

相手は、かまわず、近づいてくる。

志乃は、小太刀を抜くなり、低く氣勢をあげて、宙を飛び、相手の男に斬り込んだが、相手は、その切先を避け、さらに斬り込むのを、避けに避け、志乃が、

(不覚)

と思った時には、相手は、素手で、志乃の剣をはね飛ばし、さらに、志乃の襟^{えり}をつかむなり投げつけると、その上に、馬乗りになって、押さえ込む。

志乃は、髪から、かんざしを抜いたが、相手は、その手を押さえると、

「気が早かろう、ご婦人。わしはそなたに害意を抱いたわけではない。あやうく、斬られるところであった。女性^{にょしやう}ながらも、なんというすさまじい剣気ぞ。わしは辻斬りではない。僧形の者で

「ござる」

相手は、そういつて、黒覆面を脱ぎとる。

月あかりに、はつきりと、首から上の、坊主頭がみえた。

容貌は、少々魁偉にみてとれたが、月あかりの中ながら、悪相にはみえない。僧らしい、どこか和やかな表情にもみえる。

僧が立つと、志乃は、その場にすわり込み、

「これは、まことに失礼を。つい、気がはりました。おみなりが、あまりに」

といつて、頭を下げると、相手は、

「この風体では、無理もない。拙僧は、故あつて、この界限を徘徊しおるもの。実を申せば、辻斬り退治の女剣法者に会いたいと思つての。即ち、そなたと、いうことになるが——ま、それはよい」

といつて、少し先に落ちてゐる小太刀を拾うと、それを志乃に渡してくれ、

「いずれば、業物でござろうが」

と、きく。和やいだ顔つきである。

「備前の助宗にございます」

志乃は、そう答えてから、

「坊様も、辻斬りを、さがしておられましたとか」

と、きき返している。僧形の人が、と、いかにもふしぎに思える。しかも、なんともみごとな

身のこなしではある。

「拙僧は、行海という、一介の托鉢僧でな。さきごろより、このあたりで、辻斬りが出沒、武家はもとより、無辜の町人も、二人、三人と斬られ申した。物盗りの所業ぞ。ところが、その辻斬りが、逆に、何者かに斬られ申した。それも、女劍客らしき者の劍にての」

志乃は、黙っている。

「拙僧は、早朝に、托鉢に出がけに、その辻斬りの斬られし骸をみて、斬った者の太刀筋のみごときに、一驚を禁じ得なんだ。よほどの遣い手とみえた。よって、辻斬りを斬りたる女劍客をさがさんと、自らも辻斬り風体に変えて、夜道を徘徊しおる次第ぞ」

志乃は、ますますふしぎな僧である、と驚きを深めている。それで、

「辻斬りを、斬りましたのを、なぜ、女劍客とみわけられましたか」

と、きいてみる。どう答えてくれるか、津々とした興味を覚える。

「匂い——ということかな。辻斬りを斬りし折に、身が触れ合い、斬られし辻斬りの身に、斬りし女の匂いが残っておったのよ。拙僧の鼻は、犬ほどではないが、よく利き申す。辻斬りも、かなりの手だれの者ではあったろう。それを、なぜ、女劍客か？　と思つたら、その正体を、たしかめざるを得なんだ。辻斬りは、辻斬りを真似る辻斬りも出て、噂は噂を生んでおる。従つて、女劍客は、なお辻斬りを求めて町へ出てくるのではないかと、拙僧は察した。そうして、幸い、かくは、そなたと会ふを得た。——いずれにせよ、この夜道では話もできまい。よろしければ、拙僧の住む寺へ参られぬか。お話し申しあげたきこともござるのでな」

その口ぶりには、親しみがこめられている。

志乃は、その場に膝を揃えてすわり込み、ふかぶかと頭を下げてから、

「ご坊様。私は、富田志乃と申します。よろしく、お引廻しをいただきとう存じます」

と、殊勝な口ぶりになって、いった。

剣法者として、相手に従う意志を示したのである。斬り込んだのを、軽くあしらわれ、あげくにねじ伏せられた時から、気を抜かれた状態が、つづいている。

そうして、荒れ寺へ、連れて来られたのだ。

行海は、志乃とさし向かい、自分の欠け茶碗に注いだ酒を、うまそうにひと口飲むと、

「そなたは、名を、トダ・シノとか、いわれたな」と、きく。

「はい。父は、富田越後重康と申します。私は、側室の子でございます」

志乃がそういうと、行海は、欠け茶碗にのぼしていた手をとめて、驚いた顔で、志乃をつくづくとみ、

「ほう、越後殿の？」

と、問い直す。

「はい。のちに父は、中風を患わづらいまして」

「ほう。あの越後殿ぞ。これは驚き申した。道理で、そなたの、おみごとな太刀筋よ」

行海は、いたく感心したかに、何度かうなずき、

「そなた、よほど学ばれたな」

と、きく。関心を深めた眼もとになっている。

志乃のいう富田越後守重康は、父の重政、及び兄の重家から、家督と、中条流の道統を継いで、一万石の家柄の主となった人である。剣客としての名も高く、晩年、中風に冒されて五体の自由を失ったが、それでも人と戦って敗れたことはなかった。「中風越後」という名が、敬意をもつて喧伝けんでんされている。

行海は、その剣の血統が、志乃に及んでいることに、感銘したのである。

「母は、私の少女のころに病死いたしましたので、私は父の屋敷に引きとられましたが、道場で、門弟たちが剣を学ぶのをみておりますうち、心を動かされ、私も仲間に入れてもらい、いつしかに、剣の扱いに馴らされてまいりました。気性に、激しいところがあつたためかと存じます。父も自ら指導をしてくれました。私は二十一歳で、父より中条流の允許いんきょを受けましたが、これは、高弟の浅見正吾の許に嫁ぎましたので、餞はなむけとしての允許であつたかと思ひます。夫は、旅の多い暮らしをしておりましたが、供を連れての旅の途中、武者修行中の武芸者と争つて討たれました。私の夫は、道場では師範代をつとめておりましたが、それほど練達者が、旅先の武芸者ごときになぜ不覚をとつたのか、それがふしぎでもあり、そのわけをたしかめ、かつ、夫の仇を返さねば、と、それをのみ胸にいいきかせてまいりました。私、旅に出ましてからは旧姓を用いております。ですが、その私が」